

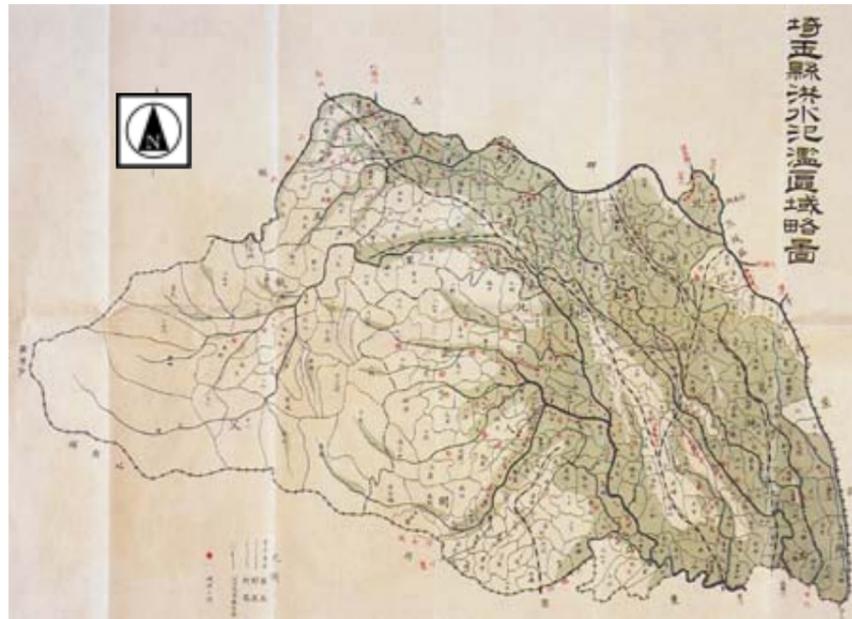
< 明治 43 年の洪水 >

「8月1日以来晴雨定まらず、連日降雨で8日に至り漸次烈しくなり、10日には暴風雨となり、…」と残されています。

山間部では山崩れを発生させ、家屋や田畑、橋や道路などの埋没・流失を招き、そして川へ大量に流れ込んだ土砂や流木は、濁流とともに堤防を決壊させました。

明治以降、荒川最大の出水となるこの洪水は、利根川の洪水と合わせて埼玉県内の平野部全域を浸水させ、東京下町にも甚大な被害をもたらしました。記録に残る埼玉県内の被害は、堤防決壊 314ヶ所、死傷者 401人、住宅の全半壊・破損・流失 18,147戸、非住宅 10,547戸、農産物の損害は約 2,400万円(現在の資産価値で 1,000億円)にものぼりました。

埼玉県内では、県西部や北部に人的被害が多く、床上浸水被害が県南や東部低地に多かったのが特徴です。交通や通信網も遮断され、鉄道は7~10日間不通。東京では泥海と化したところを舟で行き来し、ようやく水が引いて地面が見えるようになったのは12月を迎える頃だったそうです。



出典：「写真集 荒川」埼玉県

< なぜ直線化したか >

蛇行河川は、水衝部で、洪水被害が頻発し、周辺に多大な被害を及ぼしていました。

そのため、流路を直線化し、通水性をよくしました。

また、氾濫被害軽減のため、堤防近くを流れていた河川を山付部である台地側へと流れを替える工事を行いました。

さらに、右岸側の広い河川敷に遊水効果を持たせるため、横堤を建設しました。

